

東京大学・理科

1 座標空間内の点 $A(0, -1, 1)$ をとる. xy 平面上の点 P が次の条件(A)(B)(C)をすべて満たすとする.

(A) P は原点 O と異なる.

(B) $\angle AOP \geq \frac{2}{3}\pi$

(C) $\angle OAP \leq \frac{\pi}{6}$

P がとりうる範囲を xy 平面上に図示せよ.

2 次の関数 $f(x)$ を考える.

$$f(x) = \int_0^1 \frac{|t-x|}{1+t^2} dt \quad (0 \leq x \leq 1)$$

(1) $0 < \alpha < \frac{\pi}{4}$ を満たす実数 α で, $f'(\tan \alpha) = 0$ となるものを求めよ.

(2) (1) で求めた α に対し, $\tan \alpha$ の値を求めよ.

(3) 関数 $f(x)$ の区間 $0 \leq x \leq 1$ における最大値と最小値を求めよ. 必要ならば, $0.69 < \log 2 < 0.7$ であることを用いてよい.

3 座標平面上を次の規則(A), (B)に従って1秒ごとに動く点 P を考える.

(A) 最初に, P は点 $(2, 1)$ にいる.

(B) ある時刻で P が点 (a, b) にいるとき, その1秒後には P は

• 確率 $\frac{1}{3}$ で x 軸に関して (a, b) と対称な点

• 確率 $\frac{1}{3}$ で y 軸に関して (a, b) と対称な点

• 確率 $\frac{1}{6}$ で直線 $y = x$ に関して (a, b) と対称な点

• 確率 $\frac{1}{6}$ で直線 $y = -x$ に関して (a, b) と対称な点

にいる. 以下の問いに答えよ. ただし, (1)については, 結論のみ書けばよい.

(1) P がとりうる点の座標をすべて求めよ.

(2) n を正の整数とする. 最初から n 秒後に P が点 $(2, 1)$ にいる確率と, 最初から n 秒後に P が点 $(-2, -1)$ にいる確率は等しいことを示せ.

(3) n を正の整数とする. 最初から n 秒後に P が点 $(2, 1)$ にいる確率を求めよ.

4 $f(x) = -\frac{\sqrt{2}}{4}x^2 + 4\sqrt{2}$ とおく. $0 < t < 4$ を満たす実数 t に対し, 座標平面上の点 $(t, f(t))$ を通り, この点において放物線 $y = f(x)$ と共通の接線を持ち, x 軸上に中心を持つ円を C_t とする.

(1) 円 C_t の中心の座標を $(c(t), 0)$, 半径を $r(t)$ とおく. $c(t)$ と $\{r(t)\}^2$ を t の整式で表せ.

(2) 実数 a は $0 < a < f(3)$ を満たすとする. 円 C_t が点 $(3, a)$ を通るような実数 t は $0 < t < 4$ の範囲にいくつあるか.

5 座標空間内に3点 $A(1, 0, 0)$, $B(0, 1, 0)$, $C(0, 0, 1)$ をとり, D を線分 AC の中点とする. 三角形 ADB の周および内部を x 軸のまわりに1回転させて得られる立体の体積を求めよ.

6 2以上の整数で, 1とそれ自身以外に正の約数を持たない数を素数という. 以下の問いに答えよ.

(1) $f(x) = x^3 + 10x^2 + 20x$ とする. $f(n)$ が素数となるような整数 n をすべて求めよ.

(2) a, b を整数の定数とし, $g(x) = x^3 + ax^2 + bx$ とする. $g(n)$ が素数となるような整数 n の個数は3個以下であることを示せ.

1 **数学III** 【楕円】 **標準**
《円錐の方程式 (B20) ☆》

▶ **解答** ◀ $P(X, Y, 0)$ とする.

このとき

$$\cos \angle AOP = \frac{\vec{OA} \cdot \vec{OP}}{|\vec{OA}| |\vec{OP}|} = \frac{-Y}{\sqrt{2} \sqrt{X^2 + Y^2}}$$

である. $\angle AOP \geq \frac{2}{3}\pi$ より $\cos \angle AOP \leq -\frac{1}{2}$ である

2 東京大学・理科

から

$$\frac{-Y}{\sqrt{2}\sqrt{X^2+Y^2}} \leq -\frac{1}{2}$$

$$2Y \geq \sqrt{2}\sqrt{X^2+Y^2}$$

$Y \geq 0$ のもとで平方して

$$4Y^2 \geq 2(X^2+Y^2)$$

$$(Y-X)(Y+X) \geq 0 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

となる。また、

$$\cos \angle OAP = \frac{\vec{AO} \cdot \vec{AP}}{|\vec{AO}| |\vec{AP}|}$$

$\vec{AO} = (0, 1, -1)$, $\vec{AP} = (X, Y+1, -1)$ であり

$$\cos \angle OAP = \frac{Y+1+1}{\sqrt{2}\sqrt{X^2+(Y+1)^2+1}}$$

である。 $\angle OAP \leq \frac{\pi}{6}$ より $\cos \angle OAP \geq \frac{\sqrt{3}}{2}$ であるから

$$\frac{Y+2}{\sqrt{2}\sqrt{X^2+(Y+1)^2+1}} \geq \frac{\sqrt{3}}{2}$$

$$2(Y+2) \geq \sqrt{6}\sqrt{X^2+(Y+1)^2+1}$$

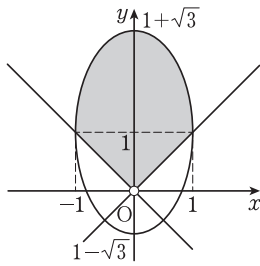
$Y \geq -2$ のもとで平方して

$$4(Y+2)^2 \geq 6\{X^2+(Y+1)^2+1\}$$

$$3X^2+Y^2-2Y-2 \leq 0$$

$$X^2 + \frac{(Y-1)^2}{3} \leq 1 \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

①, ②を图示すると、境界を含む網目部分である(原点を除く)。



(ホクソム 椎茸・Sakura)

2 **数学Ⅲ** 【微積分の雑題】 **標準**
 《定義の理解は正しくしよう (B20)》

▶解答◀ (1)

$$\begin{aligned} f(x) &= \int_0^x \frac{x-t}{1+t^2} dt + \int_x^1 \frac{t-x}{1+t^2} dt \\ &= \int_0^x \frac{x-t}{1+t^2} dt - \int_1^x \frac{t-x}{1+t^2} dt \\ &= x \int_0^x \frac{dt}{1+t^2} - \int_0^x \frac{t}{1+t^2} dt \\ &\quad - \int_1^x \frac{t}{1+t^2} dt + x \int_1^x \frac{dt}{1+t^2} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} f'(x) &= \int_0^x \frac{dt}{1+t^2} + x \cdot \frac{1}{1+x^2} - \frac{x}{1+x^2} \\ &\quad - \frac{x}{1+x^2} + \int_1^x \frac{dt}{1+t^2} + x \cdot \frac{1}{1+x^2} \\ &= \int_0^x \frac{dt}{1+t^2} + \int_1^x \frac{dt}{1+t^2} \end{aligned}$$

ここで、 $0 < \alpha < \frac{\pi}{4}$ かつ $x = \tan \alpha$ を満たす α をとる。
 $t = \tan \theta$ とすると

t	$0 \rightarrow \tan \alpha$	$1 \rightarrow \tan \alpha$
θ	$0 \rightarrow \alpha$	$\frac{\pi}{4} \rightarrow \alpha$

$$\frac{dt}{d\theta} = \frac{1}{\cos^2 \theta}$$

$$\begin{aligned} f'(\tan \alpha) &= \int_0^\alpha d\theta + \int_{\frac{\pi}{4}}^\alpha d\theta \\ &= \left[\theta \right]_0^\alpha + \left[\theta \right]_{\frac{\pi}{4}}^\alpha = \alpha + \alpha - \frac{\pi}{4} \end{aligned}$$

これより、 $f'(\tan \alpha) = 0$ となる α は $\alpha = \frac{\pi}{8}$ である。

なお、これは $0 < \alpha < \frac{\pi}{4}$ を満たしている。

$$(2) \tan^2 \frac{\pi}{8} = \frac{1 - \cos \frac{\pi}{4}}{1 + \cos \frac{\pi}{4}} = \frac{\sqrt{2}-1}{\sqrt{2}+1} = (\sqrt{2}-1)^2$$

$$\tan \frac{\pi}{8} > 0 \text{ より, } \tan \alpha = \tan \frac{\pi}{8} = \sqrt{2}-1$$

(3) $\beta = \sqrt{2}-1$ とおく。(1)より、 $y = \tan \theta$ が $0 < \theta < \frac{\pi}{4}$ で単調増加であることと合わせて、 $f(x)$ の増減表は以下ようになる。

x	0	...	β	...	1
$f'(x)$		-	0	+	
$f(x)$		↘		↗	

$$\begin{aligned} f(0) &= \int_0^1 \frac{t}{1+t^2} dt = \frac{1}{2} \int_0^1 \frac{(t^2+1)'}{t^2+1} dt \\ &= \frac{1}{2} \left[\log(t^2+1) \right]_0^1 = \frac{1}{2} \log 2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} f(\beta) &= \beta \int_0^\beta \frac{dt}{1+t^2} - \int_0^\beta \frac{t}{1+t^2} dt \\ &\quad - \int_1^\beta \frac{t}{1+t^2} dt + \beta \int_1^\beta \frac{dt}{1+t^2} \end{aligned}$$

$$= \beta f'(\beta) - \int_0^\beta \frac{t}{1+t^2} dt - \int_1^\beta \frac{t}{1+t^2} dt$$

$$= -\frac{1}{2} \left[\log(t^2+1) \right]_0^\beta - \frac{1}{2} \left[\log(t^2+1) \right]_1^\beta$$

$$= -\log(\beta^2+1) + \frac{1}{2} \log 2$$

$$= \log \sqrt{2} - \log(4-2\sqrt{2}) = \log \frac{\sqrt{2}+1}{2}$$

$$f(1) = \int_0^1 \frac{1-t}{1+t^2} dt$$

$$= \int_0^1 \frac{dt}{1+t^2} - \int_0^1 \frac{t}{1+t^2} dt = \frac{\pi}{4} - \frac{1}{2} \log 2$$

$f(0)$ と $f(1)$ の大きさを比べると, $\frac{\pi}{4} \doteq 0.785$ であり, $0.69 < \log 2 < 0.7$ であることから

$$f(1) - f(0) = \frac{\pi}{4} - \log 2 > 0$$

したがって, $0 \leq x \leq 1$ における最大値は

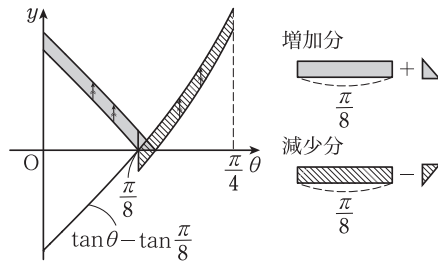
$$\frac{\pi}{4} - \frac{1}{2} \log 2, \text{ 最小値は } \log \frac{\sqrt{2}+1}{2} \text{ である.}$$

別解 【はみ出し削り論法】

実は計算をしなくても, 最小値をとる x の値を求めることができる. $t = \tan \theta$ と置換すると, $dt = \frac{d\theta}{\cos^2 \theta}$ で,

$$f(x) = \int_0^{\frac{\pi}{4}} |\tan \theta - x| d\theta$$

となる.



$x = \tan \frac{\pi}{8} = \beta$ から右に動いたとき, $f(x)$ の

増加部分 = 網目部分①

減少部分 = 斜線部分②

である. y 方向の幅は一定であるから, 等積変形することができる.

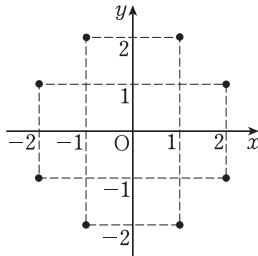
これより, ① > ② であるから, $x = \beta$ から右に動いたとき, $f(x) > f(\beta)$ である. 同様に考えると, $x = \beta$ から左に動いたときも $f(x) > f(\beta)$ である.

よって, $f(x)$ は $x = \beta = \sqrt{2} - 1$ で最小値をとる. このような論法を「はみ出し削り論法」という.

(ホクソム 椎茸・Sakura)

3 **数学B** 【確率と漸化式】 **標準**
《事象を正しく把握せよ (C20)》

解答 (1) とりうる点を図示すると, 以下のようになる.



よって, P がとりうる点の座標は

$$(1, 2), (-1, 2), (-2, 1), (-2, -1),$$

$$(-1, -2), (1, -2), (2, -1), (2, 1)$$

(2) 1秒後には確率 $\frac{2}{3}$ で $(2, -1)$ または $(-2, 1)$ に, 確率 $\frac{2}{6}$ で $(1, 2)$ または $(-1, -2)$ にある. これは, $(2, 1)$ と $(-2, -1)$ からみて対称な配置であるから, n 秒後において点 $(2, 1)$ にいる確率と $(-2, -1)$ は等しい.

(3) $A = \{(2, 1), (-2, -1)\}$

$B = \{(-1, 2), (1, -2)\}$

$C = \{(1, 2), (-1, -2)\}$

$D = \{(-2, 1), (2, -1)\}$

とする. このとき, P は奇数秒後には C または D に, 偶数秒後には A または B にいるから, n が奇数のとき P が点 $(2, 1)$ にいる確率は 0 である. P が $n = 2k$ 秒後に A, B にいる確率をそれぞれ a_{2k}, b_{2k} とすると,

$$a_{2k} + b_{2k} = 1 \text{①}$$

である. また, $2k + 2$ 秒後に A にいるのは, $2k$ 秒後に A にいて, 2度軸または2度 $y = \pm x$ に関して対称移動するか, $2k$ 秒後に B にいて, 1度は軸, 1度は $y = \pm x$ に関して対称移動するかのいずれかであるから,

$$a_{2k+2} = \left\{ \left(\frac{2}{3}\right)^2 + \left(\frac{2}{6}\right)^2 \right\} a_{2k} + 2 \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{2}{6} b_{2k}$$

$$a_{2k+2} = \frac{5}{9} a_{2k} + \frac{4}{9} b_{2k}$$

①を用いると

$$a_{2k+2} = \frac{5}{9} a_{2k} + \frac{4}{9} (1 - a_{2k}) = \frac{1}{9} a_{2k} + \frac{4}{9}$$

これより, $a_{2(k+1)} - \frac{1}{2} = \frac{1}{9} (a_{2k} - \frac{1}{2})$ となり, 数列 $\{a_{2k} - \frac{1}{2}\}$ は等比数列となるから, $a_0 = 1$ も合わせて

$$a_{2k} - \frac{1}{2} = \left(\frac{1}{9}\right)^k \left(a_0 - \frac{1}{2}\right)$$

$$a_{2k} = \frac{1}{2} \left\{ 1 + \left(\frac{1}{9}\right)^k \right\}$$

となる. (2) より n 秒後に $(2, 1)$ にいる確率と $(-2, -1)$ にいる確率は等しいから, n が偶数のとき

$$\frac{1}{4} \left\{ 1 + \left(\frac{1}{9}\right)^{\frac{n}{2}} \right\} = \frac{1}{4} \left\{ 1 + \left(\frac{1}{3}\right)^n \right\} \text{ である.}$$

(ホクソム 椎茸・Sakura)

4 **数学II** 【関数の増減・極値】 **標準**
《文字定数は分離せよ (B15)》

解答 (1) $y = f(x)$ の $(t, f(t))$ における法線の方程式を考えると, $f'(x) = -\frac{\sqrt{2}}{2}x$ より

$$y = \frac{\sqrt{2}}{t} (x - t) + \left(\frac{-\sqrt{2}}{4} t^2 + 4\sqrt{2} \right)$$

$$= \frac{\sqrt{2}}{t} x - \frac{\sqrt{2}}{4} t^2 + 3\sqrt{2}$$

4 東京大学・理科

これが円 C_t の中心 $(c(t), 0)$ を通るので

$$0 = \frac{\sqrt{2}}{t}c(t) - \frac{\sqrt{2}}{4}t^2 + 3\sqrt{2}$$

$$c(t) = \frac{1}{4}t^3 - 3t$$

円 C_t の方程式は

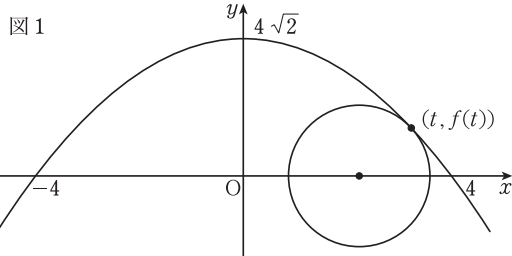
$$(x - c(t))^2 + y^2 = \{r(t)\}^2 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

であり, これが $(t, f(t))$ を通ることから

$$\{r(t)\}^2 = \left\{t - \left(\frac{1}{4}t^3 - 3t\right)\right\}^2 + \left(-\frac{\sqrt{2}}{4}t^2 + 4\sqrt{2}\right)^2$$

$$= \left(-\frac{1}{4}t^3 + 4t\right)^2 + \left(-\frac{\sqrt{2}}{4}t^2 + 4\sqrt{2}\right)^2$$

$$= \frac{1}{16}t^6 - \frac{15}{8}t^4 + 12t^2 + 32$$



(2) 円 C_t が $(3, a)$ を通ることから, ① より

$$(3 - c(t))^2 + a^2 = \{r(t)\}^2$$

$$a^2 = \{r(t)\}^2 - (3 - c(t))^2$$

$$= \frac{1}{16}t^6 - \frac{15}{8}t^4 + 12t^2 + 32 - \left(3 + 3t - \frac{1}{4}t^3\right)^2$$

$$= -\frac{3}{8}t^4 + \frac{3}{2}t^3 + 3t^2 - 18t + 23$$

ここで, $g(t) = -\frac{3}{8}t^4 + \frac{3}{2}t^3 + 3t^2 - 18t + 23$ とおくと, 求める t の個数は, $0 < a < f(3)$ としたときの $y = a^2$ と $y = g(t)$ の共有点の個数である.

$$g'(t) = -\frac{3}{2}t^3 + \frac{9}{2}t^2 + 6t - 18$$

$$= -\frac{3}{2}(t^3 - 3t^2 - 4t + 12)$$

$$= -\frac{3}{2}(t+2)(t-2)(t-3)$$

これより, $g(t)$ の増減は

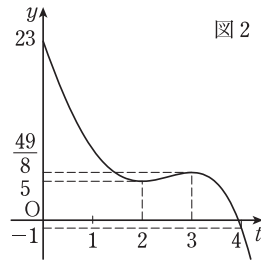
t	0	...	2	...	3	...	4
$g'(t)$		-	0	+	-		
$g(t)$		↘		↗		↘	

$$g(0) = 23, g(2) = -6 + 12 + 12 - 36 + 23 = 5,$$

$$g(3) = -\frac{243}{8} + \frac{81}{2} + 27 - 54 + 23 = \frac{49}{8},$$

$$g(4) = -96 + 96 + 48 - 72 + 23 = -1$$

であるから, $y = g(t)$ のグラフは図2のようになる.



これより, $0 < a < f(3)$ における $y = a^2$ と $y = g(t)$ の共有点の個数を考える.

$$f(3) = -\frac{9}{4}\sqrt{2} + 4\sqrt{2} = \frac{7}{4}\sqrt{2}$$

より, $0 < a^2 < \frac{49}{8}$ であるから, $0 < t < 4$ の範囲での共有点の個数は

$0 < a < \sqrt{5}$ のとき, 1個

$a = \sqrt{5}$ のとき, 2個

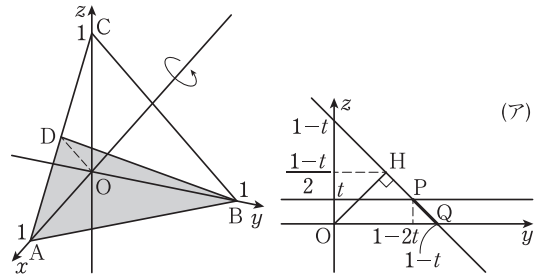
$\sqrt{5} < a < \frac{7}{4}\sqrt{2}$ のとき, 3個

(ホクソム 椎茸・Sakura)

5 数学Ⅲ【体積】標準

《 $x = t$ で切る (B25)》

▶解答◀ 平面 ABC の方程式は $x + y + z = 1$ であり, $D\left(\frac{1}{2}, 0, \frac{1}{2}\right)$ である. また, 平面 OBD の方程式は $z = x$ である. yz 平面に平行な平面 $x = t$ における断面を考える.



(ア) $0 \leq t \leq \frac{1}{3}$ のとき:

$$\frac{1}{2}(1-t) \geq t \text{ である.}$$

断面は図のような線分 PQ になる. この線分 PQ を x 軸のまわりに 1 回転させてできる同心円で囲まれた部分の面積を $S(t)$ とすると, $OP \leq OQ$ より

$$S(t) = \pi(OQ^2 - OP^2)$$

$$= \pi\{(1-t)^2 - ((1-2t)^2 + t^2)\}$$

$$= \pi(-4t^2 + 2t)$$

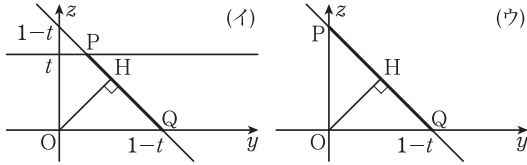
(イ) $\frac{1}{3} \leq t \leq \frac{1}{2}$ のとき:

$$S(t) = \pi(OQ^2 - OH^2)$$

$$= \pi\left\{(1-t)^2 - \left(\frac{1}{\sqrt{2}}(1-t)\right)^2\right\}$$

$$= \frac{1}{2}\pi(1-t)^2$$

(ウ) $\frac{1}{2} \leq t \leq 1$ のとき:



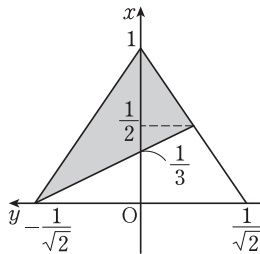
(イ)と同様に $S(t) = \frac{\pi}{2}(1-t)^2$
 以上より, 求める立体の体積 V は

$$\begin{aligned} V &= \int_0^{\frac{1}{3}} (-4t^2 + 2t) dt + \int_{\frac{1}{3}}^1 \frac{1}{2}\pi(1-t)^2 dt \\ &= \left[-\frac{4}{3}t^3 + t^2 \right]_0^{\frac{1}{3}} + \left[-\frac{1}{6}(1-t)^3 \right]_{\frac{1}{3}}^1 \\ &= \frac{5}{81} + \frac{4}{81} = \frac{1}{9} \end{aligned}$$

よって, $V = \frac{\pi}{9}$ である.

◆別解◆ 【積分?場合分け?そんなもんしないよ】

立式の過程からわかるように, ベクトル $(0, 1, 1)$ 方向の成分は無視できるから, 三角形 ADB を平面 $z = -y$ に射影してできる図形を x 軸のまわりに 1 回転させて得られる立体の体積に等しい. これは, 三角形 ADB を x 軸のまわりに $\frac{\pi}{4}$ 回転させたのち, xy 平面に射影した図形に等しく, それは, 次図の網目部分である.



よって, この回転体は, 底面の半径が $\frac{1}{\sqrt{2}}$, 高さが 1 の円錐から, 底面の半径が $\frac{1}{\sqrt{2}}$, 高さが $\frac{1}{3}$ の円錐をひいたものになるから, 求める体積は

$$\frac{1}{3} \cdot \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^2 \pi \cdot 1 - \frac{1}{3} \cdot \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^2 \pi \cdot \frac{1}{3} = \frac{\pi}{9}$$

(ホクソム 椎茸・Sakura)

6 **数学A** 【整数問題の雑題】 **やっ難**
 《素数の論証 (C40) ☆》

▶解答▶ (1) $f(n) = n(n^2 + 10n + 20)$

これが素数となるとき, 次の 2 通りがある.

【 $n = \pm 1$ のとき】:

$$f(1) = 31, f(-1) = -11$$

となるから, $n = 1$ のみ適する.

【 $n^2 + 10n + 20 = \pm 1$ のとき】:

$n^2 + 10n + 20 = 1$ のとき, $n^2 + 10n + 19 = 0$ は整数解を持たない.

$n^2 + 10n + 20 = -1$ を解くと, $n = -3, -7$ であり, $f(-3) = 3, f(-7) = 7$ となり, $n = -3, -7$ が適する.

よって, $n = 1, -3, -7$ である.

(2) $g(n) = n(n^2 + an + b)$

【 $n = \pm 1$ のとき】:

$$g(1) = 1 + a + b \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

$$g(-1) = -(1 - a + b) = -1 + a - b \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

【 $n^2 + an + b = 1$ のとき】:

p を素数として, $n = p$ となるから

$$p^2 + ap + (b - 1) = 0 \dots\dots\dots \textcircled{3}$$

【 $n^2 + an + b = -1$ のとき】:

q を素数として $n = -q$ となるから

$$q^2 - aq + (b + 1) = 0 \dots\dots\dots \textcircled{4}$$

まず, 異なる素数 p, q に対して $\textcircled{3}$ と $\textcircled{4}$ が共に成立することがあるかどうかを考える.

$$pa + b = 1 - p^2 \dots\dots\dots \textcircled{5}$$

$$-qa + b = -1 - q^2 \dots\dots\dots \textcircled{6}$$

($\textcircled{5} - \textcircled{6}$) $\div (p + q)$ より

$$a = \frac{2 - p^2 + q^2}{p + q} = \frac{2}{p + q} - (p - q)$$

となるが, $p + q \geq 4$ より a は整数とならないから, 異なる素数 p, q に対して $\textcircled{3}$ と $\textcircled{4}$ が共に成立することはない. これより, 素数になる候補は「 $\textcircled{1}, \textcircled{2}, \textcircled{3}$ の異なる 2 つの正の解」, もしくは, 「 $\textcircled{1}, \textcircled{2}, \textcircled{4}$ の異なる 2 つの正の解」である.

$\textcircled{3}$ の解 p_1, p_2 がいずれも素数であったとすると, 解と係数の関係より

$$p_1 + p_2 = -a, p_1 p_2 = b - 1$$

であるから,

$$\textcircled{2} = -1 - (p_1 + p_2) - (p_1 p_2 + 1)$$

$$= -(p_1 + 1)(p_2 + 1) - 1 < 0$$

となるから, $\textcircled{1}, \textcircled{2}, \textcircled{3}$ の異なる 2 つの正の解がすべて素数となることはない.

$\textcircled{4}$ の解 q_1, q_2 がいずれも素数であったとすると, 解と係数の関係より

$$q_1 + q_2 = a, q_1 q_2 = b + 1$$

であるから,

$$\textcircled{2} = -1 + (q_1 + q_2) - (q_1 q_2 - 1)$$

$$= -(q_1 - 1)(q_2 - 1) + 1 < 0$$

6 東京大学・理科

となるから、①, ②, ④の異なる2つの正の解がすべて素数となることもない。

よって、 $g(n)$ が素数となるような n は高々3個である。

(ホクソム 椎茸・Sakura)

要の分析

()